フレッシュタニガケ
No. 430
2025
7

「虫供養」－2025－

弊社では六月四日を「虫の日」と定め、虫（ゴキブリ、ナメクジなど）の霊を鎮めるための供養を行いました。

当日は前日までの大雨が上がり、よく晴れた素晴らしい天気になりました。東京支店、大阪支店の営業マンが本社に到着して、「鎮魂碑」の前に全社員が集まり、山海の珍味やお神酒、お米、お塩をお供えし、神主さんに丁寧な祝詞を上げてもらい、虫たちの霊を慰めました。

全社員が本社に一堂に会する年一回の行事で、玄関前で記念撮影

玉串奉てんを行う清水社長

神主さんに全社員がお祓いをしていただきました。

鍵山秀三郎さんに学ぶ

力を出しきる

資格や能力がなくても、自分の力を出しきっている人は、日々、満足感を味わいイキイキしています。

『一日一話』鍵山秀三郎著より

置くだけムカデンジャー

ゴキブリ追放宣言

殺虫剤「ゴキブリキャップ」

団子から改良続け40年

うちのイチおし

タニサケ＝池田町

夜になると台所や洗面所の物影から現れる黒い物体「G」―。多くの人にとって「天敵」であるゴキブリを、目撃することなく撃退できるのが殺虫剤「ゴキブリキャップ」だ。

キャップの中には脱水症状を引き起こすホウ酸、ゴキブリを引き寄せるためのタマネギや小麦粉を混ぜた「ゴキブリ団子」が入っている。約50年前、自宅でゴキブリに悩まされていた垂井町の故谷酒茂雄さん（1919～88年）が自宅で5千匹ほどを飼い、大学や衛生研究所に足を運びながら開発した。

このゴキブリ団子が池田町でスーパーを経営していた故松岡浩さん（44年～2024年）の目にとまり、団子製造は同町内へと波及する。1980年代中ごろには、町商工会と婦人会が協力し「町からゴキブリをいなくする運動」を始め、各家庭に婦人会が作ったゴキブリ団子を配布した。

「商品化をしてほしい」という声に応え、谷酒さんと松岡さんは谷酒生物公害研究所を設立。86年、「ゴキブリキャップ」が発売された。タマネギで寄せ付けて食べさせるホウ酸は、ゴキブリの代謝を止めて脱水させ、水がある屋外へと追いやって死なせることができるのが特徴だ。

同社では、3種類約2万匹のゴキブリを飼育し、改良試験や商品開発を行う。2006年には、試験でより誘引効果が高いと判明したピーナツを含んだ「ゴキブリキャップP1」を発売した。

20年には、包装の仕方を変更し、有効期限の長期化を実現した。従来製造から1年だったものを、開封から1年に延長。未開封では5年間効果が持続するようになった。

発売から来年で40年。清水勝己社長（57）は「40年たっても効果が認められ、使われているのはありがたい。商品の改良をさらに続けていきたい」と意気込む。

ゴキブリキャップは1平方メートルに1個置くと効果的。清水社長によると、ゴキブリがよく現れるキッチンや水回りには特に多く置くと良いという。

（長尾明日香）

ゴキブリキャップ㊧とゴキブリキャップP1を紹介する清水社長＝池田町片山で

タニサケ　1985年、「谷酒生物公害研究所」として垂井町に創業。89年に池田町に本社を移転し、社名を現在の「タニサケ」に改めた。主力のゴキブリ殺虫剤「ゴキブリキャップ」やナメクジ、ムカデ忌避剤などを製造する。社員数39人（2025年3月現在）。

たった一言

『生きている証拠ですよ』

帰宅ラッシュで混雑している電車内に恐らくホームレスであろう、ボロボロで汚れた服を着て、髪の毛も伸びたままのご老人が乗ってきた。

お風呂に入ることもできないんだろうと思わざるを得ない異臭に、車内にいた乗客はそのご老人から距離を置くため離れた。

しかし、スーツを着た若い一人の男性はその場から離れる素振りを見せない。そんな彼にご老人が、「汗臭いでしょう。申し訳ない……」と消え入りそうな声で言った。

若い男性はニッコリ笑って「生きている証拠ですよ」と一言。その言葉を聞いてご老人は涙を流した。

この若い男性のような人になろうと思った瞬間だった。

「一〇一人の、泣いて、笑って、たった一言物語」